

◆左京二条二坊十一坪の調査 —第289次・第282-16次・第282-10次

1 はじめに

本年度は左京二条二坊十一坪に関わる調査を3ヶ所で行った。いずれも宅地造成にともなうもので、昨年度におこなった十一坪東北部の調査（第279次）とともに、平城宮の東南に接するこの地域に急速におしよせつつある宅地化の波に対応しての調査である。第279次調査では正殿を中心としたコの字型配置をもつ建物群の存在を推定しており、今年度の調査でもそれを裏付ける遺構の発見が期待されていた。

第289次調査では、十一坪北辺の門に関わる遺構を発見し、第282-10次調査では、坪東北角の区画施設に関する知見が得られた。また、坪北半西部で実施した第282-16次調査では、第279次調査で検出した正殿に付属する、後殿と西脇殿に相当する建物の一部を検出し、十一坪1町を占地した大規模施設の様相解明に重要な知見をもた

らした。以下、第289次、第282-16次、第282-10次の順に述べる。

2 第289次調査

調査区の概要

調査区は左京二条二坊十一坪を東西に二分する地点を含み、二条条間路南側溝にかかるように設定した。規模は東西約13m×南北約14mの約182㎡であるが、東北隅部分に近代以降の大きな攪乱があり、実質的には約150㎡であった。調査期間は1月8日～2月3日である。

基本層序

十一坪内にあたる調査区南壁断面においては、表土（約15cm）、耕土（約20cm）、床土（約30cm）の下に、茶灰砂質土または灰褐砂質粘土の遺物包含層（約5cm～10cm）、灰色粘質土または黒灰色粘質土の整地層（約5～30cm）があり、その下の地表下約90cm（標高約60.3m）のところで黄灰色砂の地山を検出した。

検出遺構

検出した奈良時代の遺構は、道路1条、溝6条、門1棟、掘立柱建物2棟などがあり、大きくⅠ・Ⅱの2時期に分けられる。

〈Ⅰ期〉奈良時代前半

SF7095 二条条間路。Ⅱ期まで存続。南端のみ検出。
SD7100 二条条間路南側溝。Ⅱ期まで存続。幅4.5m、深さ0.7mの素掘りの東西溝。土層は大きく上層・下層に分けられる。上層堆積土は上から順に灰褐粘質土、暗灰粘質土で、下層は灰色粘質土、灰褐砂質粘土、灰色粘質土、暗灰粘質土、灰色砂、砂・炭混灰色粘質土である。
SD7290 素掘りの東西溝。A、Bの2小期に分けられる。SD7290Aは幅0.4m、深さ0.5m。調査区西端のみで検出し、大部分はSD7290Bと重なっているが、本来は調査区を東西に貫流していたと思われる。

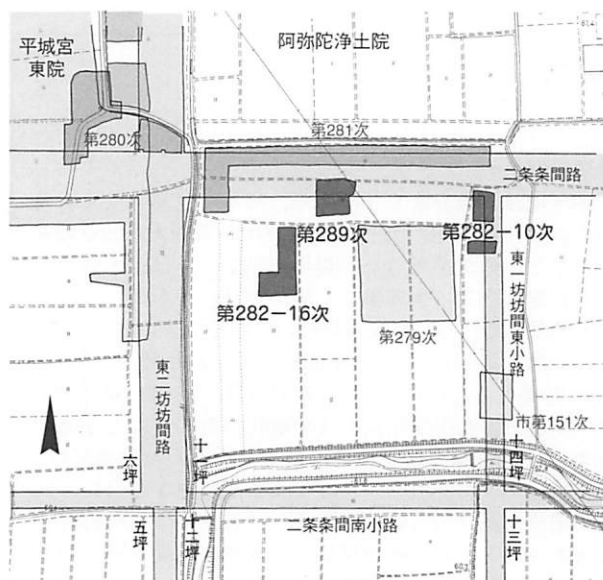


図58 左京二条二坊十一坪調査位置図 1:3000

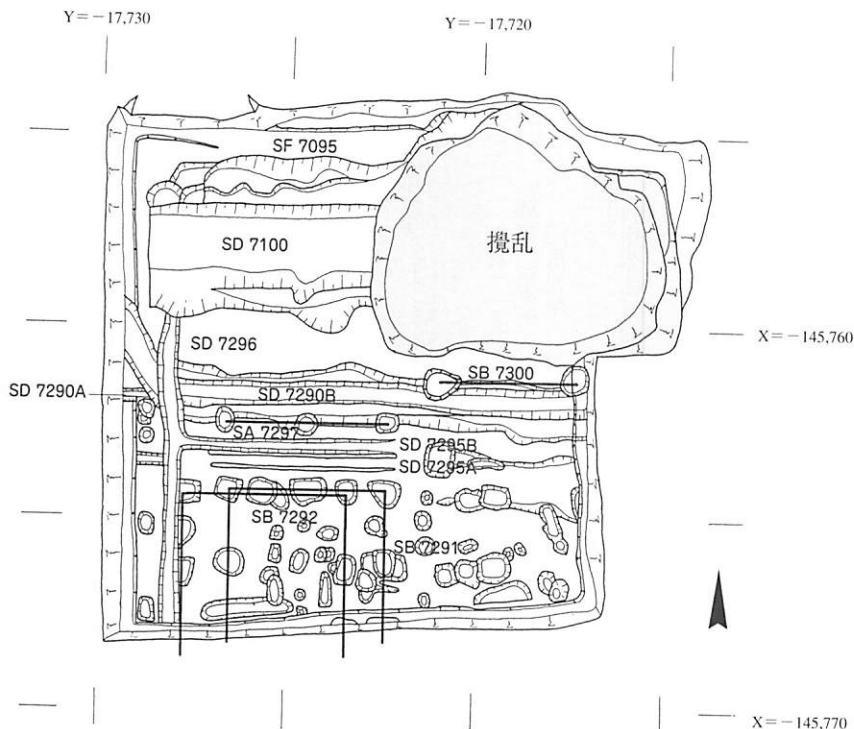


図59 第289次調査 遺構平面図 1:200

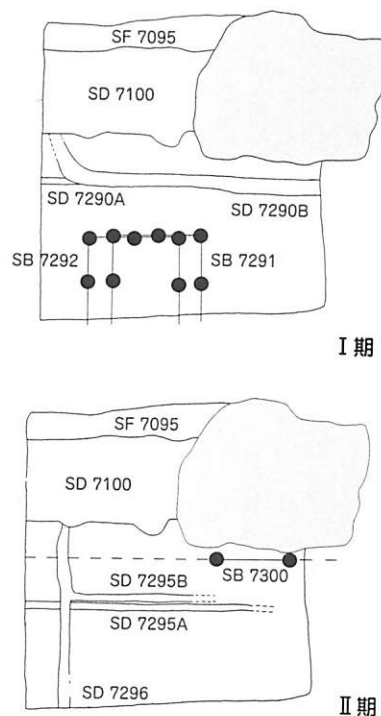


図60 遺構変遷図

SD7290Bは幅1.6m、深さ0.6m。SD7290Aと同じく南側溝SD7100の南肩から約2.0mの間隔をおいて流れる。SD7290Aを拡幅して調査区西端で北折させたもの。土層は大きく上層、下層に分けられる。上層は人為的な埋土で、上から順に明灰粘土混黒灰砂質粘土、明灰粘土混灰色砂質粘土となっており、下層は堆積土で、灰色砂質粘土、黒灰粘質土、灰色粘質土、灰色粘土である。調査区西半では、最下層に木屑を多く含む砂層を検出した。

下層から郡里制下の付札が出土し、最上層から奈良時代初頭の土師器が出土しているので、比較的に短期間で埋め戻されていることがわかる。十一坪内の排水を南側溝に流すために設けられた溝と思われる。

SB7291・SB7292 いずれも十一坪内の掘立柱南北棟建物で、桁行3間以上×梁間2間、柱間は7尺等間である。東西にわずかにずらして建て替えているが、柱穴の重複はなく、いずれが古いかは決められない。

〈Ⅱ期〉奈良時代後半

SB7300 左京二条二坊十一坪の北に開く棟門。柱間約3.9m（13尺）。門の心の国土方眼座標はX = -145,761.4、Y = -17,719.2である。東西溝SD7290Bを埋め戻した後に築かれている。東側の柱穴では、掘形の底に石の礎板、その上に木の礎板を2枚重ねて据え、西側の柱穴では、底に木の礎板を2枚、次に石の礎板、その上に木の礎板1枚を重ねて据えていることが確認できた。

この門の存在から、この東西延長上、つまりSD7290Bを埋めた上に十一坪の北面築地が造られたことが想定できるが、積み土は削平されていて検出できなかった。

SD7295 門SB7300に続く築地の南雨落溝。A、Bの2小期に分けられる。SD7295Aは調査区を東西に貫流しており、調査区中央部分では幅約45cm、現存長約4.0mの木樋を設けているが、それ以外は幅約0.6m、深さ約15cmの素掘溝である。木樋据付の状況を断面で観察すると、SB7291・SB7292の柱を抜き取った後に設置していることがわかる。木樋の四隅に沈下防止用の瓦を敷いており、うち一点は軒平瓦6663Cbである。なお、築地北雨落溝は検出されず、二条条間路南側溝SD7100と兼用していたと考えられる。

SD7295BはSD7295Aを北にずらして付け替えたもの。後述する南北溝SD7296とはT字に接続し、これより西では検出できなかった。削平された可能性もある。調査区中央部では幅40cmの木樋を設けている。北側板は現存長約0.8mであり、南側板はSD7295Aの木樋北側板をそのまま用いている。木樋以外の部分では幅0.4m、深さ15cmの素掘溝である。

SD7296 幅0.6m、深さ30cmの素掘溝。調査区を南北に貫流し、南側溝SD7100に注ぐ。最終段階でSD7295Aを切っており、SD7295BとT字に接続しているが、堆積状況をみると、SD7295Aが機能していた時期にはこれと併存して十字に接続していた可能性がある。

南側溝SD7100に注ぐ位置で堰板を検出した。長さ1.4mの東側のものだけが残る。十一坪の北面築地下を暗渠で通していたと考えられる。

〈その他の時期〉具体的な時期は不明である。

SA7297 十一坪北面築地廃絶後に設けられた東西の柱列。

(古尾谷知浩)

第二八九次調査出土土簡

二条条間路南側溝SD七二〇〇

①・美濃国片原郡□□

〔神力〕
(155)・21・3 019

②〔尾治 愛知郡カ〕□□郷戸主□
(153)・(15)・6 039

③□□〔郡カ〕〔倉カ〕郷高□里□
□□□□□□
(145)・(10)・3 081

④白髪部大万呂 庸米六斗俵
白□部□□
〔髪カ〕
165・26・4 011

⑤□□□□□□□□□□□□□□
〔庸米六斗カ〕
(168)・(5)・3 081

東西溝SD七二九〇B

⑥□□食三升 右二領人□充□
付大伴部鳥万呂 廿七日 午時
〔等カ〕
293・(31)・3 081

⑦山背国相楽郡□□里
149・(12)・5 032

掘立柱建物SB七二九二柱穴

⑧・丹波国多紀郡宗部□
戸主和尔部黒麻呂庸□
(120)・27・5 039

出土遺物

①木製品 木製品はSD7290から棒状木器47、板5、付札状木器・曲物各2、杓子・堅櫛未製品各1、SD7100から棒状木器・曲物各3、人形・篋各1、SD7296から棒状木器8など合計75点が出土している。このうち、図61はSD7290出土の堅櫛未製品である。ヒノキの板材の両面を丁寧に削った上、両側縁を挟りこみ、柄を作り出す。ついで柄部と歯部を分ける沈線を両面に入れる。歯の作り出しは表面のみ、ノミで沈線を削り込んだうえ、沈線間を削る。また、先端側から鋸で沈線間を切削した痕跡もみられる。このように歯をつけた後、仕上げに磨きかけたのだらう。

(加藤真二)

②瓦埴類 瓦埴類は、表12の如く軒丸瓦11点、軒平瓦6点などが出土した。遺構にともなうものは多くないが、東西溝SD7295Aの木樋下に据えられていた平城宮軒瓦編

年Ⅲ期の軒平瓦6663Cbは、木樋設置時期の上限（平城京還都後）を示すものとして重要である。

③木簡 木簡はSD7100から13点、SD7290Bから18点（うち削屑1点）、SB7292柱穴から1点の計32点が出土した。SD7100出土木簡の中には、郷里制下、恐らく神亀元年（724）と見られる年紀をもつもの③がある。また、庸米付れも見られ（④・⑤）、第281次調査の二条条間路北側溝SD7090出土木簡と共通する傾向がうかがえる。SD7290B出土木簡には、時刻を記した文書木簡⑥のほか、郡里制（～靈龜3年 [717]）の地名表記を持つ山背国の荷札⑦がみられ、伴出土器とともに、SD7290Bが短期間で埋め戻されたことを示している。

まとめ

今回の調査で、左京二条二坊十一坪における北辺中央付近の状況があらかとなった。

奈良時代前半には十一坪北辺部に排水のためとみられる東西溝SD7290A・Bと、掘立柱建物SB7291・SB7292がある。この時期の坪北辺区画施設についてはあきらかでないが、SD7290A・Bが機能していた段階では、この南側ではSB7291・SB7292との間が2mしかなくSD7290A・Bを北雨落溝とする築地は想定できない。一方、この北側も二条条間路南側溝SD7100との間に2mほどの空間しかなく、またSD7290Bは北折してSD7100と合流しており、北折部分に暗渠の痕跡もないので、この部分に築地は考えにくい。またSD7290Bは早い時期に埋め戻されているが、その後の段階でもSB7291・SB7292の北妻と、奈良時代後半に築かれた築地の南雨落溝SD7295Aとの間が60～70cmしかないことを考慮すると、SB7291・SB7292が存在している間は、何らかの区画施設があったとしても、それが築地であったとは考えがたい。

奈良時代後半になると築地を造り、十一坪をほぼ二分す

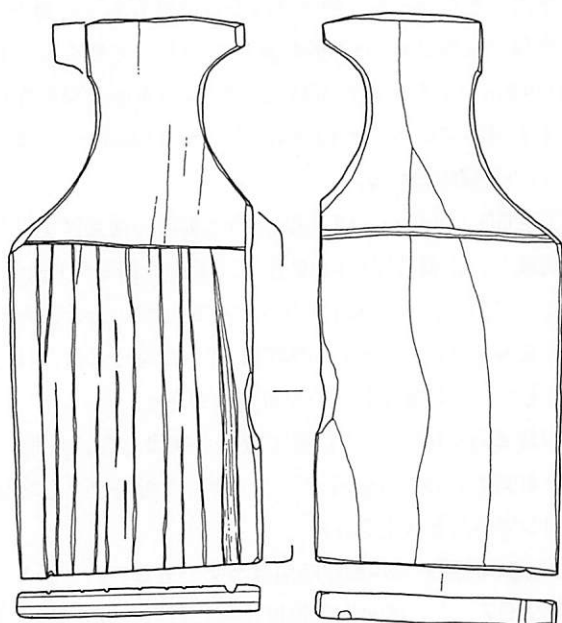


図61 第289次調査出土 堅櫛木製品実測図 1:2

軒丸瓦			軒平瓦			丸瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	重量	25.1kg
6238	A	1	6663	B	1	点数	207
6273	B	1		Cb	2	平瓦	
6311	Aa	3	6664	G	1	重量	60.8kg
	Ba	1	6682	B	1	点数	522
型式不明		5	6732	C	1	塼	
						重量	4.8kg
						点数	3
軒丸瓦計			11	軒平瓦計			6

表12 第289次調査 出土瓦塼類集計表

る位置に棟門SB7300を設ける。築地には木樋暗渠を有する南雨落溝SD7295A・Bがともない、SD7295Aの木樋設置時期は平城京還都（745年）以後と考えられる。また、南雨落溝の水および十一坪内の排水を二条条間路南側溝SD7100に排出するための南北溝SD7296があり、暗渠により北面築地の下を通していたことも判明した。（古尾谷知浩）

3 第282-16次調査

調査区の概要

調査地は左京二条二坊十一坪内の西側に位置する。第279次調査において、正殿を中心として左右対称の配置をとると推定した一連の建物群のうち、西半部の様相をあきらかにする目的で調査区を設定した。調査面積は253㎡、調査は1998年3月11日に開始し4月3日に終了した。

基本層序

調査区の基本層序は、上から耕土、床土、暗灰褐色砂質土（遺物包含層）と続き、その下に整地土層である暗灰色砂質土がある。遺構は、おおむねこの整地土層の上面で検出したが、調査区北側には整地土層がなく、地山である茶褐色砂層面で検出した。遺構面の標高は60.1～60.3mである。

検出遺構

検出した遺構は、掘立柱建物5棟、掘立柱塀6条、井戸1基、溝1条、土坑1基である。遺構の切り合い関係などからA期からD期まで4時期の変遷を推定できる。

〈A期〉奈良時代以前

SD7331 調査区西端にある幅0.4m、深さ0.4mの素掘りの南北溝。奈良時代の整地土層の下にある。

〈B期〉奈良時代中頃（第279次調査所見のD期）

SB7330 調査区東南にある桁行3間以上×梁間2間の掘立柱南北棟。柱間寸法は桁行・梁間ともに10尺。第279次で確認した東脇殿SB6957に対応する西脇殿と考えられる。東庇をもつと思われるが調査区内では確認できない。

SB6994 第279次で検出した南庇をもつ掘立柱東西棟建物SB6994西妻の柱列で、調査区北側で桁行1間ぶんを検出した。柱間寸法は桁行11尺、梁間9尺、庇の出9尺である。これによりSB6994は桁行15間の規模をもち、東西両端間のみ11尺、それ以外の柱間は9尺等間で、桁行総長139尺の長大な建物であったと考えられる。

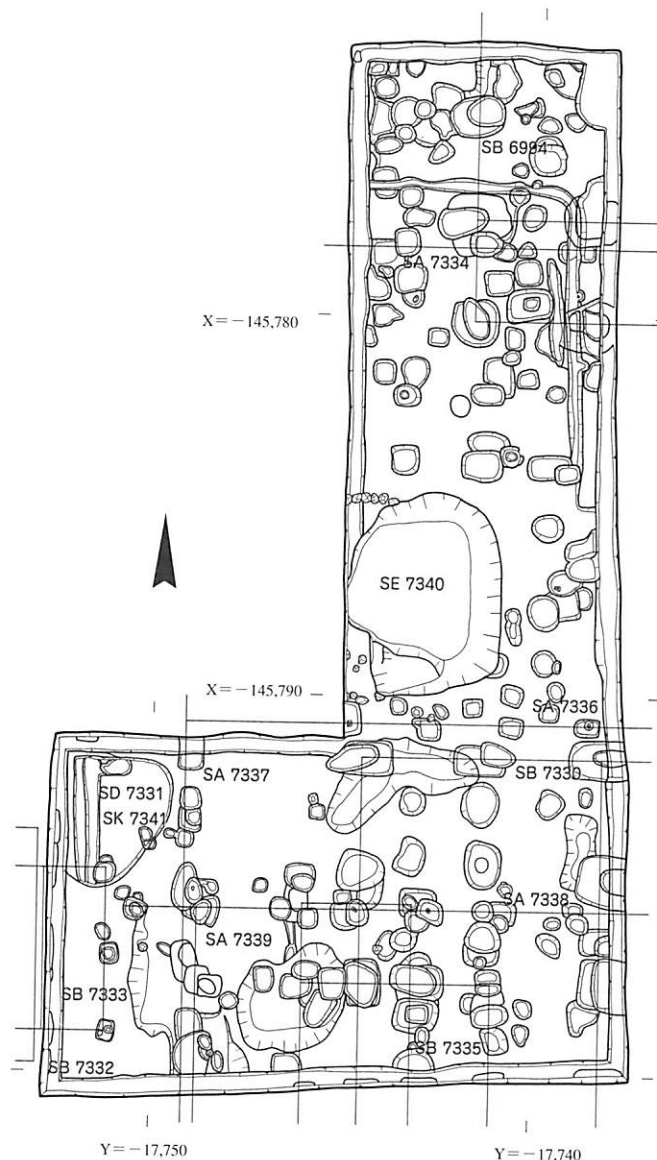


図62 第282-16次調査 遺構平面図 1:200

SB7332 掘立柱東西棟建物。調査区西端において東妻の柱列を検出した。梁間は2間で柱間寸法は10尺。南北棟になる可能性もあるが、後に規模を縮小しSB7333に建て替えられたと考え、東西棟としておく。

〈C期〉奈良時代後半

SB7333 調査区西端において東妻の柱列および東庇を検出した掘立柱東西棟。桁行1間以上×梁間2間で、柱間寸法は梁間・庇の出ともに7.5尺。

SB7335 調査区南端にある桁行1間以上×梁間1間の掘立柱南北棟。北と東にそれぞれ庇をもつが、隅には庇がつかない。柱間寸法は桁行・梁間ともに10尺、庇の出は7尺である。

SA7334 調査区北側にある掘立柱東西塀。柱間2間ぶんを検出した。柱間寸法は7尺である。

SA7336 調査区中央にある掘立柱東西塀。柱間寸法は7尺。確認したのは柱間3間ぶんであり、うち2つの柱穴で柱根が残る。調査区外に続くため未確認だが、西

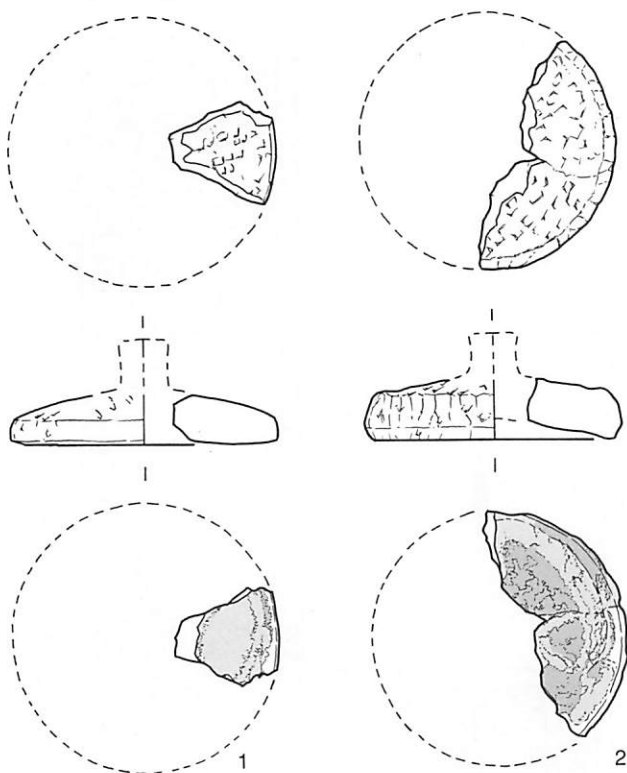


図63 ガラス埴塙蓋実測図 1:3

端で次に述べるSA7337と接続すると考えられる。

SA7337 調査区西側にある掘立柱南北塙。柱間3間ぶんを検出し、柱間寸法は7尺。北でSA7336に接続するものと考えられるが調査区外のため確認できない。

SE7340 調査区中央にある井戸。掘形は一辺5mの方形を呈し、遺構面から約1.7mの深さがある。掘形外縁の北と南に東西方向の石列（人頭大）が一部残る。井戸枠は抜き取られていて残存しない。

〈D期〉奈良時代末期

SA7338 調査区南側にある掘立柱東西塙。柱間6間ぶんを検出した。柱間寸法は6.5尺。西から2本目の柱位置で、次に述べる南北塙SA7339と接続する。

SA7339 調査区南側にある掘立柱南北塙。2間ぶんを検出した。柱間寸法は6.5尺。北端で東西塙SA7338に接続する。

SK7341 調査区西端にある多量の土器を含む大土坑。
(西山和宏)

出土遺物

①**ガラス埴塙蓋**（図63）1は、外面を斜格子タタキで調整し、内面は平滑で埴塙本体口縁の痕跡が残る。最大径10.6cmに復元でき、胎土には石英、長石などの砂粒を多量に含む。また痕跡から復元される埴塙の内径は8cm前後と推定される。包含層出土。2は、1967年平城宮東南部の小門門周辺でおこなわれた第39次調査で出土していたものである。調整方法、胎土は今回出土例と同様で

軒丸瓦			軒平瓦			丸瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	重量	32.8kg
6284	Ea	1	6644	A	2	点数	293
6308	B	1	6663	C	1	平瓦	
	I	3		?	1	重量	97.0kg
6311	Aa	1	6664	D	1	点数	847
	B	2	6667	A	1	塙	
6313	C	1	6671	C	1	重量	3.2kg
型式不明		3	6682	B	2	点数	6
			6721	?	2		
			6723	A	1		
軒丸瓦計			12	軒平瓦計			12

表13 第282-16次調査 出土瓦塙類集計表

あるが、内面の傾斜や斜格子叩きの格子の大きさに相違が認められる。最大径10.2cm。包含層出土。

ガラス埴塙に蓋がともなうことは、天武朝期の工房遺跡である明日香村にある飛鳥池遺跡の発掘調査によって初めてあきらかになった（『藤原概報22』）が、それが奈良時代にも存続することを確認した意義は大きい。形態的には大差ないものの手法的には飛鳥池遺跡例が蓋部の側縁を切り落とすのに対して、この2例は斜格子叩きを残す点が異なる。この差異は時期差をあらわしているものとも推定され、今後資料の増加を待って検討したい。なお、肥塚隆保氏（当研究所蔵文化財センター）の分析によると、蓋内面に残るガラスはいずれも鉛ガラスである。

(川越俊一)

②**土器・瓦塙類** 奈良時代の土器はSE7340やSK7341などから出土しているが、小片ばかりで特筆すべきものはない。墨書土器は、SK7341から「□厨」「酒」、SB7332の柱抜取穴から「花寺」（図65）などの3点が出土した。

出土した瓦塙類は表13の通りである。軒瓦の多くは井戸SE7340から出土した。第279次では施釉瓦が大量に出土したが、本調査区では軒丸瓦の小片（型式不明）が1点出土したにすぎない。

まとめ

本調査では、第279次調査で検出した正殿にともなう西脇殿SB7330と、東端を発見していた後殿SB6994の西端部分を確認した（図64）。注目すべきことに、このSB6994の建物中軸線は条坊計画における中軸線とは合わず、十一坪東西にある条坊道路側溝間の中軸線（ここでは「坪心」とよぶ）と一致している。左右対称に配置された建物群もこの坪心に中軸線をあわせてたつとすれば、正殿SB6950は桁行63尺（9尺×7間カ）、後殿SB6994と正殿の間にある東西棟SB6990は桁行66.5尺（9.5尺×7間カ）となる。なお、この坪心は東二坊坊間東小路心から西へ220尺の位置にあたる。十一坪に接する十二坪では、中央に四面庇の建物を配し、それを回廊がとり囲むという特徴的な建物群が営まれる（奈良市教委『平城京左京二条二坊十二坪-発掘調査概要-』1997）

が、その東西計画心も東小路心から西へ220尺であることがすでにわかっている。ただし、十二坪では西に接する東二坊坊間路が十一坪よりも狭くなっているため、この建物群の中軸線は十二坪の坪心とは一致しない。さらに、十二坪における建物群の中軸線は、条坊計画における中軸線とも一致せず、十一坪の坪心と一致しているのである。十一、十二坪の関係については、すでに第279次調査所見において、両坪出土の所用軒瓦などの様相が酷似していることから、「いわば二卵性双生児のような」密接な関連性のあったことを指摘している。本調査によってあきらかになった建物中軸線の一致は、それをいっそう裏付けるものといえるだろう。(西山和宏)

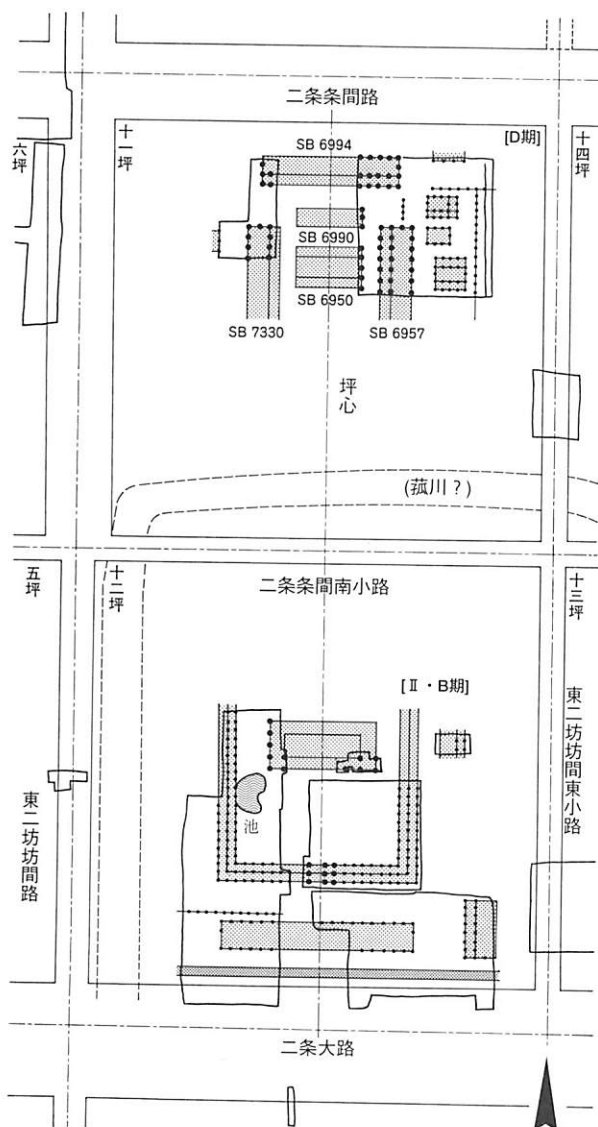


図64 左京二条二坊十一・十二坪遺構概念図



図65 「花寺」墨書土器

4 第282-10次調査

調査区の概要

この調査は個人住宅建設と駐車場建設にともなうもので、南北に近接したそれぞれの対象地に分けて調査区を設定した。ここではそれぞれ北区、南区と称する。調査面積は150㎡で調査期間は10月22日から11月12日。調査地の現状は水田であり、遺存地割では左京二条二坊十一坪の東に通じる東二坊坊間東小路と、北に通じる二条条間路の交差する地点、およびその西南部分にあたる。調査では各条坊道路の側溝と、十一坪の敷地を区画する施設に関わると考えられる溝数条などを検出した。

基本層序

調査地の現地表の標高は61.0mであり、水田耕土、床土の下に、部分的に粗砂、細礫を含む砂質土層が3～4層、ほぼ水平に堆積している。遺構は地表下約80cmで検出した。地盤層（地山）は最上層が60cm厚の黒褐色粘土層で、その下に粗砂および砂層が続く。

検出遺構

東二坊坊間東小路西側溝SD7115は上端幅2.0m、底部幅1.4m、深さ約0.7mの南北溝。溝底は、調査区の中では、北端から南端へ下がる、およそ10cmの比高差のある傾斜をなす。側溝の西肩に約30～70cm間隔で、直径5cmほどの杭列SX7279が続く。北区のなかほどで東西溝SD7274が西側溝SD7115に流れ込む。SD7274は幅0.8m、深さは15cm。底部には直径20cm前後の浅いくぼみが連続しており、敷石を抜き取った痕跡とも考えられる。西側溝SD7115の東側は東二坊坊間東小路SF7280の路面にあたる。やや東に向かって高くなるが、舗装を施した形跡はない。二条条間路南側溝SD7100については溝の南肩を検出したにとどまる。溝の堆積土は西側溝SD7115と一体となっている。

南北溝SD7270は西側溝SD7115の西肩から1.9～2.0mの間隔をおいて西にある、断面が箱形の南北溝で、北端は西に延びる東西溝SD7271に接続する。東西溝SD7274よりも古い。幅40～60cm、深さは25cmほどあり、北区の中で1.2mの間途切れている。この部分に向かっては、南北から溝底が次第に浅くなっている。溝の中には南区で

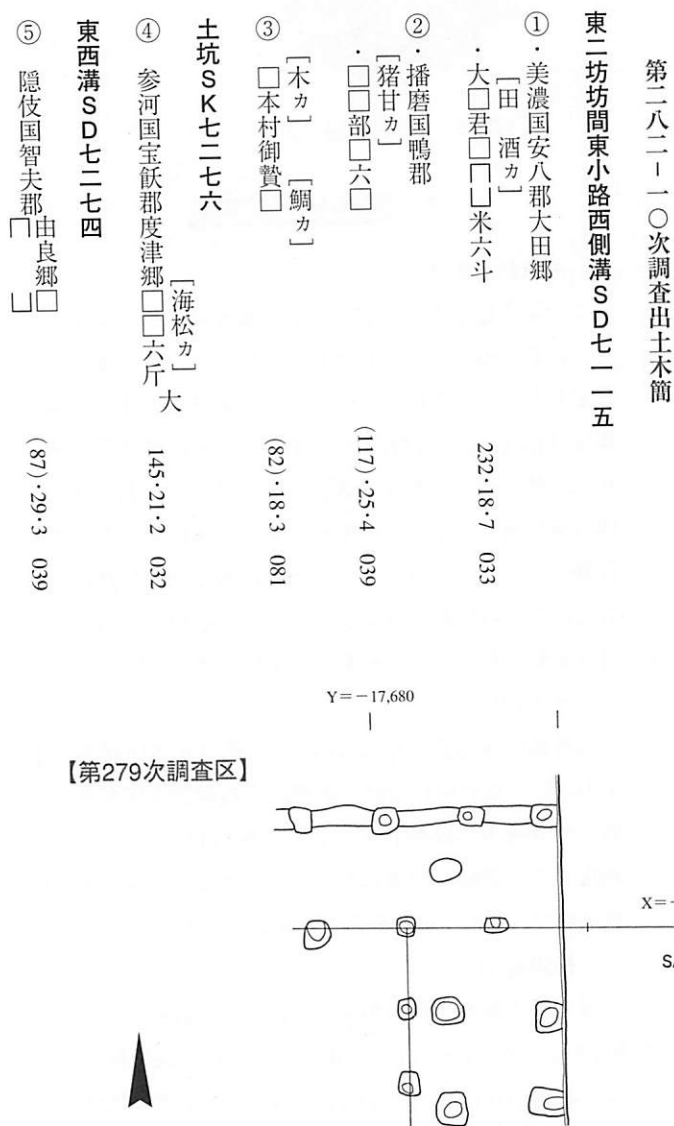


図66 第282-10次調査 遺構平面図 1:200

薄い板材が重なった状態で埋まっており、また平城宮土器Ⅰ期ないしⅡ期に属する時期の土師器片が多く出土した。東西溝SD7271も二条条間路南側溝SD7100の南肩から約2mの位置にある。このL形に続く溝は、後述するように、坪を区画する施設と推定される。

南北溝SD7273は西側溝SD7115の西肩から3.1~3.6mの間隔をおいた位置にある。幅80~120cm、深さ約20cm。北端は新しい時期の溝と重なっており、あきらかではない。この溝はSD7115との間に想定される築地塀の西側雨落溝と考えられる。なお、この築地塀想定位置には築地の痕跡はなく、浅い不整形の土坑SK7276があり、木簡や木製品などが腐植質土とともに堆積していた。

SA7275は北区西辺にある南北方向の柱列で、SD7273、SD7274よりも時期的に古い。3.3m間隔の三つの柱穴は北で東に約3.5度傾く方位を示す。この方位であれば、北には続かない。

南区西端近くで掘立柱掘形を検出したが、位置的にみて、この西側の第279次調査（平成8年度）で確認した建物群のうちD期とした時期の東西塀SA6977と一連のものと考えられる。SA6977は柱間10間、8尺等間の塀であったことになる。

出土遺物

①木簡 木簡は東二坊坊間東小路西側溝SD7115から41点（うち削屑1点）、土坑SK7276から6点、東西溝

軒 丸 瓦			軒 平 瓦			丸 瓦	
型式	種	点数	型式	種	点数	重 量	179.5kg
6131	A	1	6663	B	1	点 数	1,382
6138	A	1		C	2	平 瓦	
6272	B	1		?	1	重 量	439.6kg
6282	Bb	1	6667	A	2	点 数	3,130
6285	A	2	6682	B	2	塙	
6291	Ab	1	6685	B	5	重 量	16.2kg
6301	A	1	6691	A	2	点 数	22
6308	I	1	6694	A	1	道具瓦・その他	
	?	1	6713	A	1	刻印平瓦「三」	1
6311	Ba	1	6721	Gb	1	面戸瓦	3
6313	Aa	3		J	1		
	C	3	型式不明		22		
	G	1					
型式不明		15					
軒 丸 瓦 計		33	軒 平 瓦 計		41		

表14 第282-10次調査 出土瓦塙類集計表

SD7274から3点のほか、出土遺構不明のもの4点の、計54点が出土した。主なものの釈文は別掲したが、SD7115のものでは、村を単位に貢納されたと思われる贅の付札③が注目される。そのほか郡郷里制施行（717年）以後の美濃国のおそらく庸米付札とみられるもの①、播磨国の付札②がある。SK7276からは参河国④の、SD7274からは隠伎国の荷札⑤などが出土した。両者とも郡郷里制以後のものである。

②木製品 木製品は小路西側溝やその西側の築地塙絶後に形成された土坑SK7276から出土した。鋸形、琴柱、横櫓、ヘアピン、鎌柄、曲物、杓子、糸巻、箸などのほか、数十点の籌木がある。

③瓦塙類 瓦類の出土数量は表14に示す通りである。軒瓦については、型式のあきらかな37点のうち、西に隣接する第279次調査区で出土した247点（型式の判明したのは189点）と同型式のものは半数の18点であった。それ以外のものの中には法華寺創建時の軒丸瓦6301Aや法華寺阿弥陀浄土院所用軒平瓦6713Aなどがあり、十一坪以外の周辺の場所で使用されていたものが含まれていると考えられる。

まとめ

本調査および第289次調査では、十一坪の外周を区画する施設に関わるいくつかの遺構を確認した。その中で注目されるのは、奈良時代初期の区画施設が坪北辺では東西溝SD7290・B、東辺では南北溝SD7270であり、いずれも周囲の条坊道路の側溝とは2m前後の間隔をおいて設定されていることである。先述のように第289次調査では、このSD7290の南側のさらに間隔をおいた位置に同時期の東西溝はなく、しかもSD7290の2mほど南に同じ時期の南北棟の北妻がある。したがってSD7290を築地塙の北雨落溝とはみなしがたい。そうすると、SD7290と二条条間路南側溝SD7100との間に築地塙を想定しうるか否かということになる。

平城京内での確認例をみると、たとえば左京三条二坊

坊間路西辺の築地塙は、条坊道路西側溝を東雨落溝とし、基部幅2m前後の規模をもち（奈文研『平城京左京三条二坊』1975）、今回の検出例に近似した状況をみせる。この場合、2mのうちに築地本体とその両側の犬走り（端地）をとる必要がある。延喜木工寮式築垣条には、屋根架構部を除いた高さ1丈3尺から7尺までの築地幅と必要工人数が記されているが、そのうち最低の高さ7尺の場合、築地本径つまり築地本体の基底部幅は3尺とある。これであれば、基部幅2mの上に築地がたちうるかもしれない。しかしこの例は坊の中央に通じる坊間路とはいえ、側溝心々間距離が6mの小路クラスの道路であり、大路クラスの幅員をもつ二条条間路に面する区画施設としては不相応な規模であることは否めない。その上、第289次調査区の27m西方でおこなった第281次調査区において、SD7290の延長位置に該当する溝は存在しないことが確認されている（本書56～64頁参照）。十一坪の東辺の南北溝SD7270は北端で西に90度屈曲して東西溝SD7271となるが、この東西溝は位置的にみて第289次調査区のSD7290に連なるとみられる。坪の東辺に通じる条坊道路は、側溝心々間距離がおよそ7.1mの南北小路であり、上述の左京三条二坊坊間路と同クラスといえるが、幅約2mの帯状の空間は十一坪の北辺から同じ規模で連続している。こうしたことから、SD7290およびSD7270は築地塙に関わる溝ではなく、坪の外周を区画するとともに、坪内の排水に関連する施設と考えておきたい。

この2条の溝には平城宮土器Ⅰ期ないしⅡ期の土師器だけが出土したことを考えると、奈良時代のはじめのある期間には、十一坪の周囲（の一部）は細い溝によってのみ画されており、後に東西溝SD7295および南北溝SD7273を坪内側の雨落溝に、条坊道路側溝を外側の雨落溝とする築地塙を坪の区画施設として造営する、という過程を推定できる。その改作の時期が、第279次調査で判明したコの字型大規模建物施設の造営される天平初年であるとすれば、平城京遷都後20年ほどの間、この十一坪は立体的な区画施設のない場所であったことになり、平城宮に隣接する坪として特殊な位置づけがなされていた可能性も想定できる。ただし、第289次調査では、この築地塙の南雨落溝は平城京遷都（745年）以後につくられたとされており、築地塙造営の年代については、なお検討の余地がある。（井上和人）